

中国の大学とオンライン交流会を経験した学生の学びの成果

ーテキストマイニングによる分析ー

久保 宣子・楊 麗栄・柴垣 博孝

要旨

本研究の目的は、中国の大学とのオンライン交流を経験した学生を対象に学びの成果を明らかにし、教育への示唆を得ることである。結果、プログラムに参加して学んだことの特徴が明らかになった。学生は自文化との違いを楽しみながら認識していた。共通点や相違点を発見し、気づきや学びを得ていったと考えられる。また、交流の際、言語の違いから生じる言葉の壁は決して交流を阻むものではないことを学んでいた。ほかに、日本語を学んでいる中国の学生から学習姿勢にプラスの刺激を受けていると考えられた。

キーワード：異文化接触，テキストマイニング，オンライン交流会

I. はじめに

世界のグローバル化に伴い、日本国内の多文化化も進んでいる。現在の日本では、在留外国人数は増加傾向であり、2020年には約290万人の中長期在留者と特別永住者がいる。その国籍・地域数は196であり、国籍別では、中国・韓国・ベトナムの順に多く、上位3か国で半数を超えている¹⁾。こうした状況は、多くの日本人にとって異文化を背景にもつ人々との接触の機会が増大していることになり、さらに接触する年齢や場面、状況も多様化することを意味すると考えられる。

教育の現場においては、異文化間で活躍できる人材の育成や多文化共生力育成をめざしたオンラインによる教育方法の成果がいくつか研究報告されている。坂本²⁾は、国内学生と国際学生の遠隔交流授業及び対面交流授業の実践から、国際学生との対話が国内学生にとって多様な視点や価値観の発見につながっていること、異文化交流が自文化の意味や価値をあらためて見直す機会になっていることを指摘している。また、小玉³⁾は、日米の学

生達が協働で学習する COIL(Collaborative Online International Learning) という新しい教授法に基づいた実践型の日本文化の授業を実施し、学生達が異文化と直接に接触する中で、自発的に気づき、物事を批判的に捉えることで、自己や民族を超えた相対的な視点を獲得、世界観を変容させていくことを指摘している。

これまでは、学生達が異文化と接触する機会、海外研修などで現地に行くまたは留学生をはじめ国内にいる外国人と直接交流する方法が主流であったが、COVID - 19の流行下でオンラインでの交流が拡大し、その活用は日常化しているといえる。

オンラインを活用した異文化接触は、日常的方法になりつつあるが、このような方法で異文化に直面し交流した学生の成果が明らかにされた報告はまだ少ないのが現状である。

II. 研究目的

本研究の目的は、中国の大学とのオンライ

ン交流を経験した学生を対象に異文化接触による学びの成果を明らかにし、教育への示唆を得ることである。

近年、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築きながら、地域社会の中で共に生活できるよう多文化共生の地域づくりを推し進める必要性が増している。本研究はこのような地域社会づくりに貢献できることが期待される。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

令和 5 年度に A 大学で実施された中国の大学とのオンライン交流プログラムに参加した A 大学の学生とした。春学期に参加した A 大学の学生 21 名と秋学期に参加した A 大学の 1 年生 35 名の計 56 名とした。

2. オンライン交流プログラムの位置づけ

このプログラムは、学生の国際交流意欲の向上、及び国際的な学習機会の拡充と多様化を進めることを目的に中国の大学と春学期と秋学期に各 1 回実施された。学生の任意または希望者が参加して行われた。

交流した中国の大学は、春学期は 52 の専攻を有する B 大学であり、秋学期は職業教育体系を 19 学科有する C 大学でいずれも日本語学部の学生である。

3. オンライン交流プログラムの内容

Voov meeting を使用し、双方で交互にグループ発表を行った。内容は、自国の生活文化や学生生活に関するものについて学生が作成したスライドを使用しながら紹介した。秋学期の C 大学については、グループ発表に加えて、5～6 名で 1 台の PC を使用しフリートークを行った。実施したプログラムの概要について表 1 に示す。

4. 調査方法

研究の趣旨などについて口頭と書面で説明を行い、研究協力に同意が得られた学生を対象とした。対象者には、プログラム終了後に調

表 1 オンライン交流プログラム概要

B 大学 と の プ ロ グ ラ ム	5分	はじめのあいさつ 学生代表あいさつ
	80分	グループ発表
		①B大学 テーマ：西安の美食について
		②A大学 テーマ：学食紹介
		③B大学 テーマ：中国のパンダについて
		④A大学 テーマ：日本の看護の役割と特徴 —大学での学び—
		⑤B大学 テーマ：中国のアニメについて
		⑥A大学 テーマ：日本のアニメ
		⑦B大学 テーマ：華山について
		⑧A大学 テーマ：日本の神社とお寺
	5分	終わりのあいさつ
C 大学 と の プ ロ グ ラ ム	5分	はじめのあいさつ 学生代表あいさつ
	30分	グループ発表
		①C大学 テーマ：中国の伝統的な祝日
		②A大学 テーマ：写真で紹介する私の大学生生活
		③C大学 テーマ：中国の美食
		④A大学 テーマ：ゼロから中国のお菓子
	5分	指定された教室へ移動
	40分	フリートーク
		10グループにわかれて実施する。両大学で1グループ4～6名となり各グループで1台のパソコンを使用して行う。
		①指定された教室に移動する
		②グループで1台のパソコンを使用する
		③はじめに一人一人自己紹介をする
		④簡単なゲームをする
		⑤考えてきた質問を交互に問いかけ、会話する
		⑥会話を楽しむ
		⑦移動時間になったら、終わりの挨拶をして移動する
	5分	指定された教室へ移動
	5分	終わりのあいさつ

査票を記入してもらい回収した。

5. 調査時期

令和 5 年 6 月～12 月

6. 調査内容

異文化への接触状況および学んだことを用紙に記述してもらった。

7. 分析方法

Text Mining Studio ver. 6.1 (NTT データ数理システム) を使用した。

テキストマイニングの特徴は、集められたデータを「数量化」と「視覚化」しテキストデータから有効な情報や発見を取り出すことに

大きく貢献している⁴⁾とされる。

記述内容を単語頻度解析、ことばネットワークの作成、評判分析を行った。

単語頻度解析は、文章中に現れる単語の出現回数をカウントする^{注1)}。ことばネットワークは、テキスト全体から関連の強い言葉同士をまとめて、いくつかのかたまりをつくる。このかたまりをひとつの話題として捉えることにより、テキスト全体をおおまかな話題ごとに分けることができる^{注2)}。同一行・同一文章内に出現する確率及び頻度の高い単語同士は、関連が強いと抽出される^{注3)}。評判分析は、良いイメージで語られることば、悪いイメージで語られることばを抽出する。表現抽出の結果をネットワーク図を用いて表示させ、どんなことばがどのような評価表現を用いて語られているのかを概観することができる^{注4)}。

8. 倫理的手続き

研究対象者には調査の趣旨、個人情報の保護、本研究以外の目的では使用しないこと、参加同意の自由、拒否時も教育や成績評価に不利益が被らないこと、資料の保存と廃棄等について口頭で説明した。同意書の提出をもって同意したこととした。本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理審査委員会の審査をうけ承認を得て実施した(23-10)。

IV. 結果

1. プログラム参加者

A 大学からの参加者は、地域経営学科・人間健康学科・看護学科の1年生から4年生であった。中国の大学からは、いずれも日本語学部の学生が参加し春学期のB大学は20名、秋学期のC大学は58名の参加があった。

2. 研究対象特性

回答者は、10歳代38名(95.0%)20歳代2名(5.0%)であり、男性10名(25.0%)女性30名

(75.0%)であった。

1) 回収率

春学期の対象学生21名のうち18名(85.7%)、秋学期の対象学生35名のうち22名(62.9%)からの協力を得た。全体では、71.4%であった。

2) 異文化への接触状況

「過去1年間に外国人と交流したことがある」と答えたのは9名(22.5%)であった。

「過去に外国語圏に訪問したことがある」のは7名(17.5%)であった。「外国語圏での生活の経験」があったのは、4名(10.0%)であった。「外国人の家族や友人がいる」と答えたのは10名(25.0%)であった。「外国語の動画を見る頻度」は、よく見る5名(12.5%)、少し見る12名(30.0%)、あまり見ない13名(32.5%)、見ない10名(25.0%)であった。

「外国語の書物や雑誌、記事を読むか」の質問には、よく読む0名(0%)、少し読む4名(10.0%)、あまり読まない7名(17.5%)、読まない29名(72.5%)であった。「外国語による会話ができるか」の質問には、できる0名(0%)、少しできる7名(17.5%)、あまりできない14名(35.0%)、できない19名(47.5%)であった。

3. 基本情報

基本統計量は、総行数120行、一行あたりの行の長さ68.1文字、文章の総数207個、一文あたりの文章の長さ39.4文字、現れた単語の総計1695語、現れた単語の種別数563語であった。

4. 単語頻度解析

オンライン交流プログラムに参加して学んだことの記述から、文章中に現れる単語の出現回数をカウントした(図1)。最も多かった単語は、交流した相手である<中国>であった。<文化>に関することは、2番目に頻度が多かった。「中国のアニメや文化、食事など様々なことを知ることができて楽しかった」「文化の違いを知ることができてとても

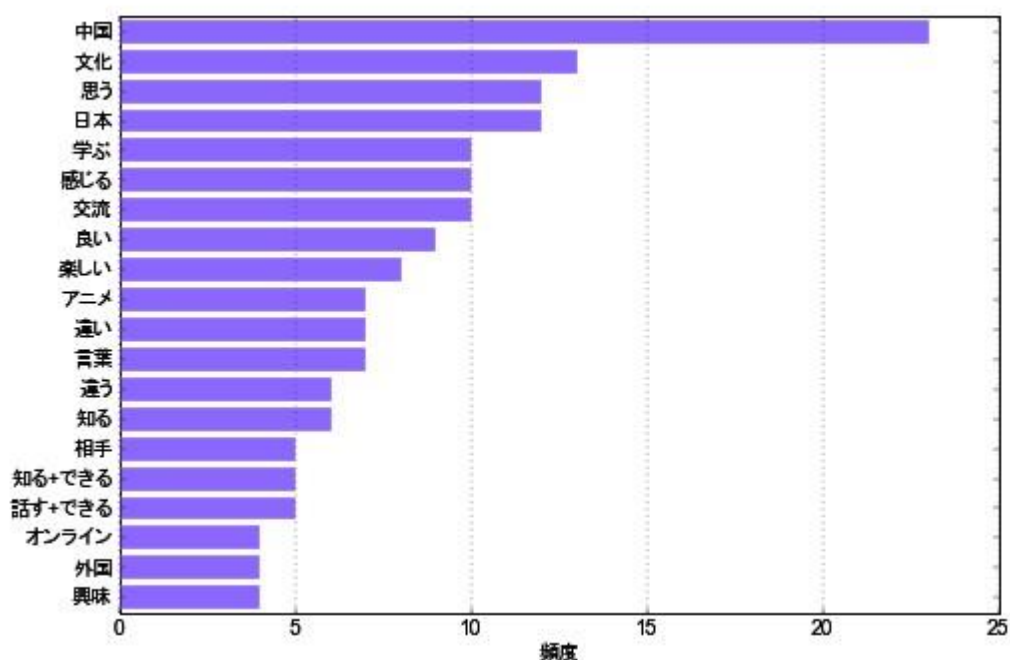


図1 単語頻度解析

良かった」「日本の文化に興味を持ってくれる人は世界中にたくさんいるわけで、今回こうして中国人の方々と関わりを持てて嬉しかった」と記述され、楽しみながら異文化交流を進めていたことがわかった。楽しいだけでなく「異文化の方々と交流する上でとても大切なことを学んだ」とあり、「中国の文化を学ぶ事はもちろんできたが、想像以上に中国の皆さんが礼儀正しくリアクションもしっかりしてくれたので、中国に対する印象がより良くなった」と価値観の変化を自覚している学生もいた。

5. ことばネットワーク

ことばネットワークは、テキスト中にどのような話題が存在するのか把握できる。単語同士のつながりを図示することで、データ中に出現する話題を把握する(図2)。<文化>や<交流>を中心とする話題では、「普段使

れば聞いている側も理解力が増し、お互いに意思疎通を図ることができるのだと感じた」

「普段のメディアの情報からでは読み取れない文化や価値観、人柄を知り学ぶことができたと感じる」「交流の場と言うのは、何も知らずに想像だけの固定概念をくだけ、見る世界を広げ、多様な人への理解を深めることができる」といった記述内容から生成されていた。

<アニメ>や<美食>を中心とする話題では、「中国の色や流行のアニメ、ネットの素晴らしさ、食も文化も言語も違う国が本当に存在していると言うことを今までで1番感じられた」「中国の美食やアニメなど素晴らしいところがたくさんあるのだと思った」といった記述内容から生成されていた。

<楽しい>を中心とする話題では、「言葉が違って、お互いが興味を持ち、歩み寄ることで楽しい交流になると感じた」「国が違って共感できることもありもちろん違う部

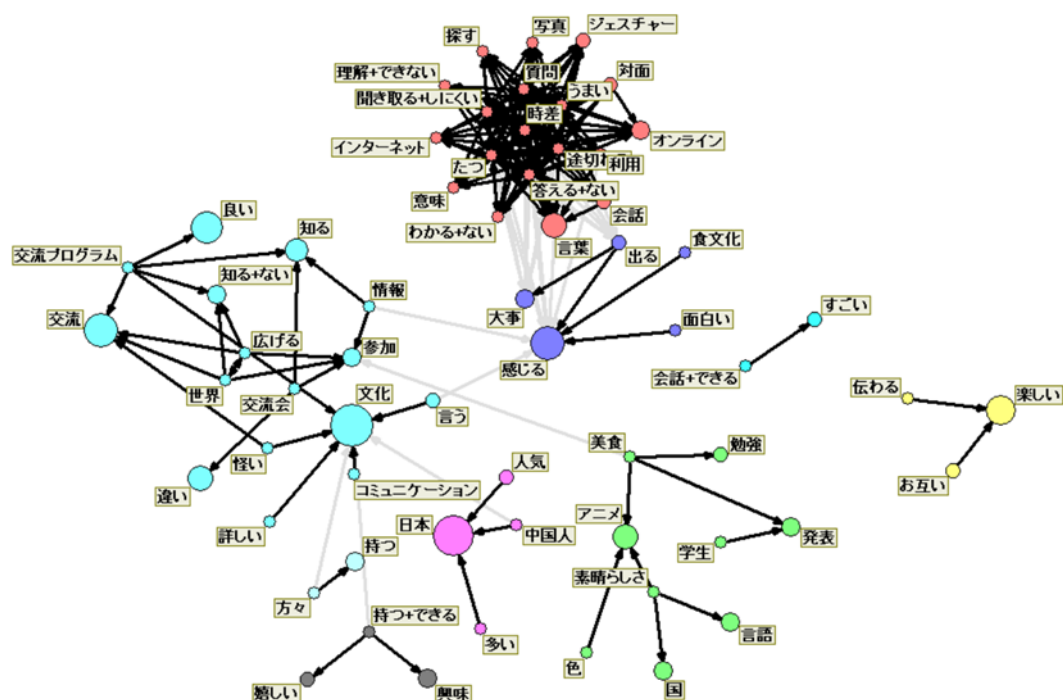


図2 ことばネットワーク

分もありとても面白いと感じた」「自分の国のことをお互いに話し、交流できたことがとても楽しかった」「お互い通じていない部分がありながら楽しく会話ができてよかった」「発表があったことで楽しく中国のことを知ることができた」といった記述内容から生成されていた。

6. 評判分析

評判分析の結果は、＜異文化＞の単語がネガティブ捉えられたが、それ以外は良いイメージで語られていた。ネットワーク図を用いて表示させ、どんなことばがどのような評価表現を用いて語られているのかを概観した(図3)。＜交流＞＜会話＞のことばは、共通して＜良い＞＜楽しい＞の評価表現で多く語られていた。「ある程度相手の国の知識があると会話が弾み内容が濃いものになる」「異文化と交流することで知らなかったことを知り、新しく興味を持てるものに出会えてとてもうれしかった」などが語られていた。＜対面＞

＜姿勢＞のことばは、＜大事＞の評価表現で語られていた。「対面でないため相手の表情がわかりにくい場面があり、いつか対面で交流することができたらいいなと思った」「会話をするときは対面が大事だと感じた」と語られ、コミュニケーションの方法に関する気づきのほかにも「まだ2年しか学んでいない日本語も話することができて、これほど知識があるのだと思い、学ぼうとする姿勢がとても大事だと感じた」と交流を経て、相手の学習姿勢に刺激を受ける語りもみられた。

V. 考察

今回オンライン交流会に参加した学生の異文化接触状況をみると、外国語圏への訪問や生活の経験は、それぞれ2割未満であり、過去1年間に外国人と交流したことがある学生は2割程度であった。さらに、外国語の動画、書物や雑誌に触れている頻度も過半数以下の状況であった。このことから、学生は本

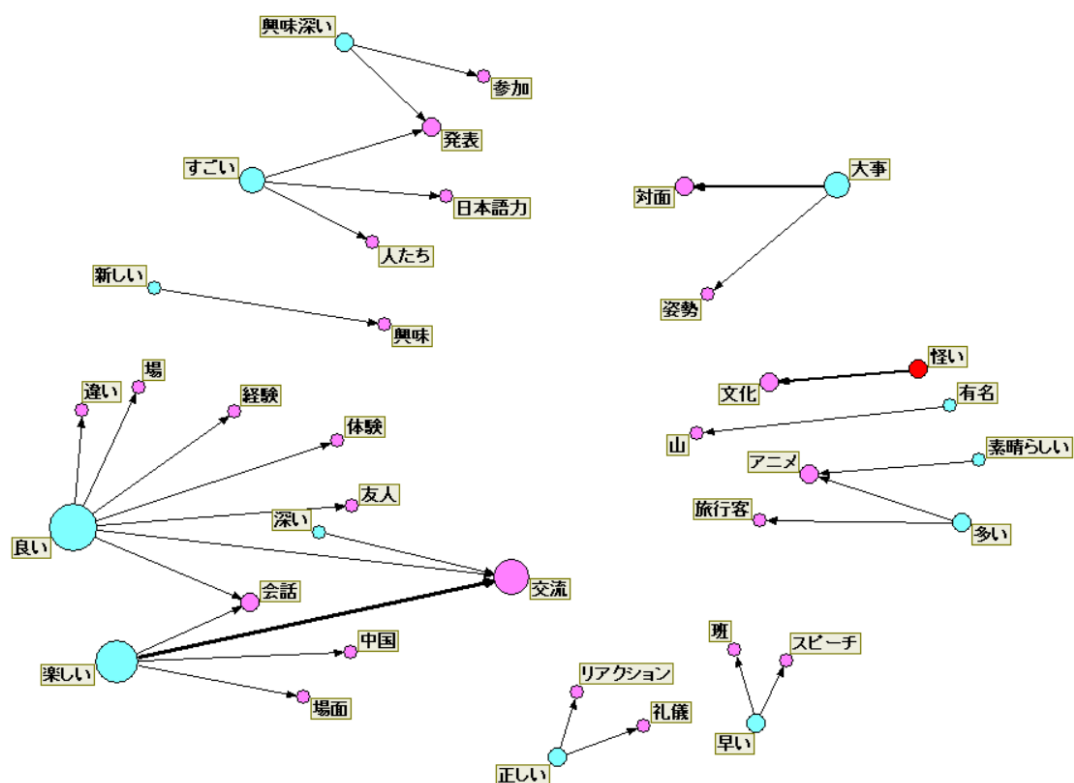


図 3 評判抽出ネットワーク図

プログラムへ高い緊張感の中で参加活動をしたことが推測される。

先行研究において山内⁵⁾は、オンライン異文化交流の事例研究の有用性について、意識を外に向けるきっかけとなり、相手の外国語やコミュニケーションのスキル、積極性などからプラスの刺激を受けていることがうかがえると指摘している。本研究においても、＜文化＞に関することは、2 番目に頻度が多く「中国のアニメや文化、食事など様々なことを知ることができて楽しかった」と語られ、自文化との違いを楽しみながら認識していた。＜アニメ＞や＜美食＞を中心とする話題では、「中国の色や流行のアニメ、ネットの素晴らしさ、食も文化も言語も違う国が本当に存在しているということを今までで 1 番感じられた」と表現されていることから、アニメが人気という共通点や食文化に関する相違

点を発見し、気づきや学びを得ていったと考えられる。また、コミュニケーションについてことばネットワークの話題から、「普段使い慣れていない言語でも、相手に伝えたいと言う気持ちを持ってコミュニケーションをとれば聞いている側も理解力が増し、お互いに意思疎通を図ることができるのだと感じた」や「言葉が違ってても、お互いが興味を持ち、歩み寄ることで楽しい交流になると感じた」と語られ、言語の違いから生じる言葉の壁は決して交流を阻むものではないことを学んでいたと考えられる。さらに、評判分析の結果では、「まだ 2 年しか学んでいない日本語も話すことができ、これほど知識があるのだ」と思い、学ぼうとする姿勢がとても大事だと感じた」と日本語を学んでいる中国の学生から学習姿勢にプラスの刺激を受けていると考えられた。

小玉³⁾は、学生達が異文化と直に接触する中で、自発的に気づき、物事を批判的に捉えることで、自己や民族を超えた相対的な視点を得、世界観を変容させていくことを指摘している。ことばネットワークの<文化>や<交流>を中心とする話題では、「普段のメディアの情報からでは読み取れない文化や価値観、人柄を知り学ぶことができたと感じる」このことは、学生がオンライン交流会で異文化と直に接触をし、自発的にこれまで得ていた中国に対する情報を批判的思考で客観的に捉えなおしたことを意味する。また、「交流の場と言うのは、何も知らずに想像だけの固定概念をくだけ、見る世界を広げ、多様な人への理解を深めることができる」と語られ、本プログラムによる経験がこれまでの価値観を変容させ、世界観を広げたと推測された。

今回、プログラムの実施方法は、相互のグループ発表とC大学についてはグループ別に1台のパソコンを使用したフリートークであった。学生の学びの記述からは、「発表しあったことで楽しく中国のことを知ることができた」「お互い通じていない部分がありながら楽しく会話ができてよかった」と語られた。グループ発表で事前に準備したことをお互いに紹介することができ、グループ別の交流でさらに踏み込んだ会話が可能になった。このことから、プログラムの実施方法は、妥当であったと評価できた。

一方で、神谷ら⁶⁾は、年間を通して、日本人学生と留学生の協働的活動からの意識の変容を明らかにした研究では、徐々に形成した信頼関係は、活動をより高次の活動へとつなげていく活動の連鎖を可能にする原動力になっていることが捉えられていると指摘している。今回は、1回限り90分でのオンライン交流会であった。今後、学生同士が信頼関係を築き、活動をより高次の活動へとつなげていくような活動の連鎖を可能にするには、回数を重ねていくことが課題と考えられる。

VI. おわりに

本プログラムの参加により、学生は自文化との違いを楽しみながら認識していた。共通点や相違点を発見し、気づきや学びを得ていたと考えられる。また、交流の際、言語の違いから生じる言葉の壁は決して交流を阻むものではないことを学んでいたと考えられる。ほかには、日本語を学んでいる中国の学生から学習姿勢にプラスの刺激を受けていると考えられた。本プログラムの経験がこれまでの価値観を変容させ、世界観を広げたと推測された。

VII. 謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金)研究等補助金の助成事業を受け行った。

利益相反

本研究の開示すべき利益相反はない。

注¹⁾～注⁴⁾ 株式会社数理システム：Text Mining Studio ver.6.1 マニュアル, 2018, 188-263

引用文献

- 1) 出入国管理庁在留外国人数.
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html
(2023.5.10)
- 2) 坂本利子(2013). 異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるかー多文化共生力育成をめざしてー,立命館言語文化研究 24 巻 3 号,143-157.
- 3) 小玉安恵(2018). オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試みー異文化間で活躍できる人材の育成をめざしてー, 日本語教育 169 号,93-

108.

- 4) 藤井美和,小杉考司,李政元(2005). 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門,中央法規出版,東京.
- 5) 山内真理(2014). オンライン異文化交流の事例研究— A case study of online intercultural exchange —,千葉商大紀要 51 (2), 261-274.
- 6) 神谷順子,中川かず子(2007). 異文化接触による相互の意識変容に関する研究,留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果, 北海学園大学学園論集 134,1-17.

執筆者紹介 (所属)

久保 宣子

八戸学院大学

健康医療学部看護学科 講師

楊 麗栄

八戸学院大学

地域経営学部地域経営学科 准教授

柴垣 博孝

八戸学院大学

地域経営学部地域経営学科 教授